

自分のことは自分でやろう！ 旭市通学合宿

旭市通学合宿は子どもたちが親元を離れ、違う学年と一緒に集団生活をする中で、自主性や協調性、社会性を養い、自分と家族の関係を見つめる機会をつくれるように実施しています。

子どもたちは地域の公民館などを宿泊場所にし、集団で登下校をします。帰宅後は学習のほか、食事作りや布団の準備、片付けなどを自分たちで行います。

今年度は昨年まで実施していた海上地域(鶴巻小・滝郷小・嚶鳴小)、干潟地域(中和小・萬歳小・古城小)に加え、飯岡地域(三川小・飯岡小)でも実施し、3地域合わせて約70人の小学校5、6年生が参加しました。

自分たちで作る食事

食事を作ることは通学合宿の中でも重要な活動です。今年度は旭市保健推進員の皆さんに協力してもらい、班ごとにシューマイやあえ物、地元の食材を使ったカレーライス作りなどに挑戦しました。初対面の人もすぐに打ち解け、それぞれが自分の役割を見つけて取り組むことができました。できた料理は彩りもよく、子どもたちは「おいしい」と言いながら夕飯を楽しみました。

登下校は合宿の仲間と一緒に

通学合宿では合宿の仲間と一緒に徒歩で登下校します。

特に滝郷小や萬歳小の子どもたちは、宿泊場所から学校が遠いため、4km近くの道のりを約1時間かけて歩きます。子どもたちは普段と違った通学路を合宿の仲間と歩くことが新鮮で、楽しく登下校することができたと話しました。地域によっては登下校に青少年相談員が同行し、子どもたちの安全を見守ってくれました。

多くの人の支え

このほかにも、宿泊場所近くの個人宅でもらい湯をしたり、地域の入浴施設を利用したりするなど、多くの人の支えがあってこの事業が成り立っています。合宿に参加した子どもたちの多くが、家族の支えがあって自分が生活できていることを実感したようです。

今後も地域の協力の下、家族や地域を大切に、たくましい子どもに育ってくれることを願い、事業を進めていきます。



みんなで協力して夕飯を作る

あさひ輝いた人々 第16回

耳鼻咽喉科の 第一人者

かなすぎ えいごろう
金杉 英五郎 (1865～1942年)



金杉英五郎は日本の耳鼻咽喉科の先駆者であり、第一人者でもありました。その業績は単に医学界にとどまらず、政治の世界にも進出して国会議員となり、社会的にも貢献しました。

慶応元(1865)年に鐺木村の金杉与右衛門の三男として生まれました。東京医科大学別科(東京大学の前身)卒業後、明治21(1888)年にドイツに留学し、ベルリン大学などで学びました。この時代、地方出身者で海外留学をした人はそれほど多くありませんでした。

ドイツ留学から日本に帰り、東京病院で専門の治療を始めるとともに、耳鼻咽喉科の講義を始めました。これが我が国で最初の耳鼻咽喉科の講義といわれています。

明治26(1893)年に東京耳鼻咽喉科医院を設立、東京慈恵医院医学校教授の仕事もしました。後にこの学校が大学に昇格して東京慈恵会医科大学となると、初代学長になりました。日本耳鼻咽喉科学会や東京耳鼻咽喉科研究所を設立し、その会長や所長になりました。耳鼻咽喉科雑誌の編集を行うなど、その分野の発展に努めました。

英五郎は自らを「町医者」と称していたそうです。それはどんな大病院の医者であろうと、医師と患者の人間関係をおろそかにしてはいけないという、町医者の精神が大事であるという考えに基づいていました。

大正6(1917)年に衆議院議員となりました。自身が考えている社会医学を実現するには、政治の力が必要だったからです。当選後は国会議員として日本の医療発展のため努力し、北里柴三郎らと共に、医師出身の政治家として高い評価を受けています。

昭和3(1928)年に勲二等瑞宝章を受章。昭和17(1942)年に亡くなりました。



粘膜と骨をはがすために使われる
医療器具「金杉式剥離子」